

昭和二十九年四月十三日

人口問題審議会第二回第一部会速記録

於 虎の門共済会館

人口問題審議會第二回第一分部會議事速記錄

昭和二十八年四月十三日

人口問題審議會第二回第一分部會議事速記錄



人口問題審議會第二回第一部會議事速記録

昭和二十九年四月十三日  
於 虎ノ門 共済会館

一 開 会 午後一時五十五分

一 議 事

一 閉 会 午後四時十五分

出席者 (五十音順)

會長 下村 宏

會長代理 永井 亨

委員 那須 皓 委員 賀川 豊彦

飯沼 一 宿 笹山 忠夫

石井 英之助 下村 宏



本員

沢田節藏

" 長村貞一(代理)

" 林惠海

" 藤林敬三

" 前田多門

" 村瀬直養

" 永井亨

" 村山道雄

" 山際正道(代理)

専門本員

" 館菜秀三

" 本田龍雄

" 美濃口時次郎



昭和二十九年四月十三日（火）

人口問題審議会第二回第ニ部会速記録

於 虎の門共済会館

午後一時五十五分開会

○那須部会長　まだお見えにならない方もおありのようではありますが、定刻を過ぎましたので開会いたします。

前会の速記録をお手元におまわしいたしてありますが、何かこれにつきまして誤謬その他お気づきの点がございますでしょうか、もしありましたら御指示を願いたいのであります。

前会におきまして、本多専門委員より、人口問題研究会の人口対策委員会の御調査の結果を要約して御披露いただいたのであります。

そのあとで賀川委員より、いろいろと日本における食糧増産の余地のまだ大きい点についてお話をいただいたのであります。そのとき賀川委員のお話になりま



したクロレラの実物をこの次の部会に御持参いただきたいという二をお願ひ申  
し上げましたところ、本日お持ちをいただいたのであります。これがそうであり  
まして、先刻もおまわしいたしましたが、そのときまだおいでになつておらなかつた  
委員もおありのようでありますから、もう一回おまわしいたします。これは  
非常に栄養価植の高いもので、味もたいへんよろしい。廣川委員はこれが日本に  
おける相当大きな産業になるのではないかと、いうお考えを持つておられるよう  
であります。少し出してその味をお試しいただいてけつこうであります。

○本多専門委員

ちよつと前後しましたが、先ほどの誤植の誤を訂正しておきます。

誤植を直すほどの報告でもないのですが、大事なところで二、三箇所申し上げます  
と、第一部会速記録の二十ニページの四行目のエの方から読んで参りまして、  
八%とあるのは「八〇%」の誤り、それから同じページのあとから二行目にあ  
る「社会主義化」は「社会進化」に、二十六ページの二行目の下の方に「工業」  
とあるのは「農業」に御訂正願いたいと存じます。



○那須部会長　それでは本日は、第一学会の取扱います三つの事項——人口収容力に  
関する事項、人口の地域的分布に関する事項、生活水準に関する事項、この三つ  
の中で、まず人口収容力の問題を取上げて論議したいわいかかといつ下村会長の  
御提案で、そのように進んでおるのでありますか、これに関しましてまた委員各  
位の御意見を十分に伺っておらぬのであります。この前に廣川委員のお話を伺  
いましたか、本日は何かの委員の方々からそれに対して御意見を伺えればたいへ  
ん幸せだと存じます。

○村山委員　私この前欠席をいたしましたか、速記録を拜見いたしました。本多専門  
委員の御説明になりました人口問題研究会の人口収容力に関する御構想につきま  
しては、私はその御趣旨においては賛成でございます。そこでこの問題に関しま  
しての私の考えにつきましましては、本会議の最初にも御意見を申しましたし、また  
私の考えの概要を印刷いたしましたして皆さんにごらんいただいております次第でござい  
ますが、人口収容力を増かいたします一つの問題といたしまして、人口収容力の



時に少い地域に人口収容力を増加するという問題。そのことは結局、現在人口収容力の少い純農村地帯に対する第二次産業の育成の問題でございますが、この問題も本多さんの御意見として取上げられております。ただこの問題は、それかよいといふことになつて実現に移る際に、すぐ一つの支障または反対の意見が現われて参ります。そのことは国の別の審議機関である国土総合開発審議会——これは本日おいでになつておられます飯沼委員が会長をしていらしやるのであります。そこで時に政府が力を入れて、開発すべき特定地域を全国で十九箇所指定になつたのであります。その論議の際におきましても、やはり二つの意見が対立をいたしましたのであります。一つは、今後の日本経済を立てて行く上において、人口収容力の非常に少い地域において時にそこに資源が豊富なる場合においては、第二次産業を強力に起して行くべきである、農村地帯の貧困な状態といふものは、日本の資本主義発達の当初の段階においてはそれがプラスに働いたかもしれないけれども、現在はその問題が日本経済再建の一つの大きな障害になつておるので、この問題を解決しなければいけないといふ主張でございます。それに反対をいた



します思想は、そういうことを申しても、今の日本のように資本が非常に少なくて、わずかの資本を利用して日本の再建をやろうという場合に、そういうところの手をかけたおつたのではとても向に合わない。経済効果の急速に上らない、従つて現在の日本においては、今まで人口が集中しておつたかもしれないけれども、やはりその地域の新しい産業の開發に今後重兵を置いてやるべきである———そう露骨には言わなくては、そういう考え方から来る主張でございます。

そこで私考えますのに、そういうような国の経済効果というものはもちろん考えなければならぬことでありますし、また当面の近い将来における経済効果ということを考えることも日本の現状として非常に必要でありますか、経済の効果の議論をするにしても、もう少し先の見通しを持たなければいけないのではないかと。要するに現在購買力が非常に少なくて、日本の国内における消費水準というものが特に農村地帯においてきわめて低い。結局、いくらつくつていろいろと奨励金をもらつておりまして、それで肥料を買つて税金を納めてしまつと、あとは次の



年の米の代金を目当てにして前借りをしなければならぬ、農業手形で借りて備  
えて行かなければならぬ、そういう状態の場合におきまして、子供を学校に通  
わせておりまして、その生活水準は非常に低いのでございます。そのほかの購買  
力というものはほとんどない。従いまして今後の日本の大きな考え方をいたしま  
しては、もちろん外国貿易を奨励しなければならぬのであります。現在のよう  
に国民の購買力の地域差が非常にばらばらな場合におきましては、購買力の特  
に低いところを引上げるということは、経路効果の一つとして考えるべきことでは  
ないかということをお私どもは強調いたす次第でございます。特定地域の指定の  
場合において、もつという主張を相当取入れて、現在相当進んでおる五つか六つの  
地域にするか、あるいは未開発の地域まで入れて十九にするかという点について  
は十九の方が取上げられることによりまして、現在その範囲において未開発地の  
購買力の引上げによる日本経路の好転化の努力が行われておる次第でございます。  
しかしながらこれはやはり今後の一つの大きな問題になつて来るであらうと存



じます。

本多さんの御説明にも、結局農村の経済力か上るといふことは日本経済全体かよくなることであるといふように言われておりました。私も満足であります。これは結論が出て行きます場合においては必ず反撃を受けるものであります。私がそういう主張をいたしましたも、大体君の言つてゐる意味はわかるけれども、そういう経済効果といふものをどうやつて計算するのかと言われますと、どうも私は経済効果算出の高等数学かわからないものでありますから、その算出の方法はまた專回家に考えてもらうよりほかはないと存じます。この人口問題の關係では高等数学に非常に堪能な方がたくさんいらつしやるようでありますから、この購買力の地域差をなくすことによつて日本の経済かどれだけよくなつて行くかといふことについて、ここ三三年だけを考えた経済効果論に對抗できるだけの何らかの計算方法といふものが一体立つものであるかどうか、それを数学的に証明するものがあるかどうか、大体の意味はわかるけれども、はっきりと算定かできない



と、いうような事について、専門の方々に御研究をいただきまして、その点について一つの結論を出していただき、たますれば、それかせに罷われましたときに、それを実行に移すことに対する反撃の資料としては最も有力なものになるのではないかと、いうように考えますので、この点の前にも一度意見を申しまして、少しくどいようでありませうか、さらに重ねて申し上げた次第でございませう。

○澤田委員　　せんだつての部会のごときは本多さんのお話を大半は承つたのでありますか、その点と、どういふお話がありましたか伺いたいと思ひます。この第一部会の速記録は私さようまで忙しくてよく読んで参りませんでしたか、この部会が設けられました際にも私不幸にして海外旅行をしております、皆さんの御審議にあずかり得なかつたのであります。

爾来何かいふ機会にお伺ひしたいと思つておつたのでありますか、人口収容力のこととせんだつても承りましたか、日本の内地のことを今話しておられましたか、人口の収容力と、いふことは、外國にでも日本の人口を収容してもらふところがあ



れはそれを考えてもよいと思います。それで具体的に申し上げますと、移民の問題です。これは今の仕事のわけ方の関係で、いずれの部会でお取扱いになるお考えか、あるいは、この人口収容力の問題については国内の方に考えを集中して行くお考えですか、それをお知らせ願いたいと思います。

○那須部会長　お答えいたします。ただいま澤田委員から御指摘のありました移民の問題は、この審議会の総会が開かれましたときにもすでにこれに関しての発言があつたのでありまして、日本の人口問題を解決する幾多の方策の一つとして、これは当然考えられるべき問題だと思えます。それをいここで取扱うかということになりまして、これは第一部会で取扱うことになります。第一部会の方の取扱、事項に人口収容力に関する事項と人口の地域的分布に関する事項と二つあります。ただいまお話の移民の問題は、両事項に關係を持つておることと思つてあります。それでただいままで人口収容力に關しては、むしろ国内の人口収容力ということが中心となつて考えられて参つたと存じますが、それでは不十分であるから



国外に人口の収容力を求めよという御意見でありますならば、ここで話いただいてもよいのであります。ただいま永井委員から、それは人口の地域的分布に關する事項というところで考えていた、たゞことがよいのではないか、こういう御意見であります。あるいはその方がよろしいかもしれませんが……。

○澤田委員　いすれにしても第一部会でお取扱いを願いたいと思ひます。

○永井委員　実は人口向題研究会をつくつております人口対策委員会では、二つ特別委員会をつくつておりますが、第二部特別委員会の方の人口調整に關する事項を扱う部門で移民を扱おうということになつております。こちらの方では、この一部会の方の人口収容力の冊で扱うことになつております。それで人口対策委員会の方では昨日もその特別委員会を申したのであります。移民は非常に重大な向題であるからこれは人口対策として研究する必要がある、特に移民だけは切り離して移民に關する意見をまとめて出さうというので、ある委員に御委託して現在原案をつくつておりますが、でさ次第こちらの方にまたおまわしをいただきます。移



民の問題は収容力と地域的分析と両方に関連しておりますから、特に移民だけは別に意見をとりまとめたらなおよいのじやないかと思ひますが、御参考までに申し上げておきます。

○澤田委員　この問題は永井先生も申されておりますように、またそのときに論議していただきたいと思ひます。

○那須部長　移民の問題は人口の収容力にも関連することでありますけれども、人口問題研究会の方でもこれについて調査を進めておられるようでありますし、少しこれはあとまわしにいたしました方が都合がよろしいかと思ひます。ただいまは内地の人口収容力という点にむしろ限定してお話を願つた方が好都合かと存じます。それで先刻村山委員より、ある産業を起すについてのその投資の経済的効果というものが、ただ目先のことを考えないのでそれがいわゆる一救万波を呼ぶ起すようにいろいろ、な形ではね返つて来て大きく広がつて来る、直接の経済的効果だけを見ない、甲の仕事をやつた方が乙の仕事をやるとよりむしろ生産額も多いように見



えるけれども、甲の方は、ここでまっしてまっして、その余波が及ぼすのは、この方は  
直接には少いようだけれども、これが、ろく、の産業に影響を及ぼして行つて、  
全体をあわせて考えてみると、その方が国民経済におけるより大なる影響を及ぼ  
し、人口の収容力を増すという点において、むしろよいのじやないか、これは高等数学  
を必要とし複雑な計算が必要であると思ふが、これについてはその方面に練達の  
方むこの委員会にはおいでになると思ふから、むとつ考慮してもらいたい、こうい  
う御注文が来たのであります。館さん、むとつ、さういうことについて御心配して  
いただけますか。これはなかく、むずかしい問題で、外国の学者の中にも、ただ  
いま村山委員のおつしやったような異を考慮されて、非常に複雑なたぐさんの連  
立方程式をこしらえて、さうして、さういふことをやつた結果かどうなるかとい  
うことを計算して出せるような方式を考へる人もあります。ただこれにつきまして  
も完璧なものではありませんので、批判の余地があると思ひますけれども、ただい  
ま村山委員のおつしやつたことは、卓なる夢のようなものばかりではなく、ある



程度今日具体化しておると申せると思いますが。ただそれが、たとえば日本の農村で二次産業を起す、大都市で二次産業を起すという場合にどうなるかということをごまかに計算するだけの資料が、近き将来において集められるかどうか、これはちよつとむずかしい問題ではないかと思ひますが、しかし一三の具體的事例をつかまえて、さうしてそれから何かの見通しがつければ、それを全体の問題としても考えることがあるいはできるかもしれせん。御提案はよく専門委員の諸先生にも御考慮いたたくことにいたしましたよう。

○飯沼委員　今の問題に関連をいたしましたして、この前の会議で本多さんからたいへんに詳細にお話を伺いました中で、大都市の問題と地方における中小都市の問題が出ました。賀川委員も大都市の問題について御論及になりましたが、その問題について私の考えておるところをちよつと申し上げます。

結論を申し上げますと、東京、大阪その他の大きくなり過ぎた都市は、もう人口収容力がないと私は考えるのでございます。現にわれ／＼か住んでおります東



京を見ましても、昨日の夕刊に国警本部が発表いたしました交通白書なるものの中において、自動車については東京では飽和点に達してある、非常な大事業を起して東京の都市の改良をやるとか何とかするのでなければ交通事故の頻発はどうか防げない、おそらく今後ますます増加するであろうと、この意味のことが書かれておるのでございます。これは前々から都市計画の方面では、交通量の増加は人口増加の事情よりもなお大きな数をもつて現われておるといふことが言われておるのでございまして、こういう大都市においてたとえは事業を経営することが非常に非能率的なものであるといふことは以前から言われておることです。

その他過大都市の経営上の非能率の問題、現に東京でも都心部においてほもう明瞭にそういうことが現われておるのであります。これは先ほど村山委員のお述べになりました経済効果というような向題から申しまして、はたしてどういふ結論が出るのか私にはわかりませんけれども、常識から考えまして、過大都市が事業を経営するのに適当な場所でないといふことは私は言ひ得ると思つてあります。



す。前会賀川委員がお引きになりましたあのフォードの工場の分散の事例などは、私は最も敬服すべき先覚者のやられることであると考えるのであります。それらが経済上そういうふうにはなはだ不適当なものになつておるといふことは、これは常識上言い得ると思ひます。それらの都市の財政の問題、これもかつてイギリスの古い統計雑誌にアツシユモア、ベーカーといふ人が発表したことがあります。都市の経費は、これを人口一人当りで割つてみますと、人口が多くなればなるほど一人当りの経費はふえるのであります。ちよつと考えますと、多ければそれだけ頭割が安くなるように考えられますが、事實はそうではなくて人口が増加すればするほど一人当りの経費がふえて来る、つまりそれだけ過大都市が非能率であるといふことが申されておるわけでありませう。

かつて三四年前のことでありませうが、ロンドンのある都市行政をどうするかといふことについて委員会がござりまして、合併して区域を拡張したものか、あるいは現在のままで周囲の町村をそのままにしておいた方がよいかといふことで調査



会ができましたときに、結局現在のままでよろしい、合併しないという結論が出  
まして、たたいま申したペーカリーという人の統計学が一つの根拠になつておるの  
であります。当時ロンドンの一人当りの経費が六十三三三リング九ペンスで、その  
次のクラスの大都市にありましては四十六三三リング八ペンスというふうなぐあ  
いで、だんく、人口が減つて来るに従つて一人当りの経費も減つておるのであり  
まして、決して大きくなればなるほどそれだけ都市の経営が経済的になるとい  
うものではないのであります。これはむしろイギリスばかりでなく米國においても  
さういふ実例が現われております。つまり三万ないし五万くらいのところでは一  
番安い一人当りの経費で経営ができ、人口がふえるに従つて一人当りの経費がふ  
えて行くといふような実例が現われておるのであります。都市の財政の上から申  
しましてもその通りであります。

次に社会的な向願、これもわれわれの常識から考えまして、今日の東京とい  
うようなところが決して健全な自治体であるとは考えられないのであります。前会



買川委員がお引きになりました犯罪の増加の例などし、やはり人口が増加するに  
従つてその割合がふえておる。これは決して健全な社会を示すものではないとい  
うことはいろいろとたくさんの学者によつて論せられておることをごさいます。そ  
ういふような呉から申しまして、先ほどの経済効果の問題はどうか知りませんが  
とにかく過大都市にこれ以上人口を集めるということは決して當を得たものでな  
く、何か他の方法を考えらるべきではなからうか、ほつておけばどうしても自然  
に東京とか大阪とかいう過大都市に集まりがちでありますか、それを国策として  
集まらないように——といつてもこれを法律で禁止するわけには参りませんが、  
もつと魅力のある、国民が好んでそちらの方に向つて行くといふような場所をつ  
くつてやる必要があると思つてあります。つまり国策としてどういふ方針をと  
るといふことをどこかでふとつきめていたきたい。この人口問題審議会におき  
まして、過大都市にこれ以上人間が集まることは好ましくないといふ一つの圍  
の方針といふものをきめていただきたいと思つてあります。



かつて一九二四年に、アムステルダムで国際都市計画会議がございましたときに、各国から集まりました都市計画の人々が一つの決議をいたしております。その決議の内容の第一は、大都市の無限の膨脹は決して望ましいものではないといふこと、第二は、過大都市の発生を防止する一つの方法として過大都市の周囲に衛星都市をつくつて人口を分散せしめることを考慮すべきであるといふこと、第三は、都市が際限なく連続して膨脹することを防止するがために、市街地のまわりは農耕地、牧場等の緑地帯をもつて囲まれること、希望ましい。そのほか二、三ありまして、こつこつ大原則を決議いたしました。各国この方針で都市計画の分野においてはやろつてはならないかといふことで相談がさゆられたのであります。その後各国でどんな方法をとつておるかと申します、**国**によつていろいろ事情が違ひましようが、たとえばイギリスにおきましては一九三八年に緑地帯を確保する方法としてグリーン・ベルトアクトといふものができております。市街地が無限に膨脹することを防止する方法としてグリーン・ベルトを確保しようといふ目



的を持つた法律でございます。それから一九四六年にはニュー・タウンス、アク  
トつまり衛星都市をつくりやすくするところの法律が出されておるのでありま  
す。こういうふうに国によりましては、その国の国策として過大都市にこれ以上  
人間が集まらないように分散させるという方針をとっておるのであります。日  
本では今まで国の方針としてそれがきめられたことを見ないのであります。こ  
れはまことに遺憾なことであります。先ほど村山委員がお話になりましたように、  
企業家の最もつくりやすいところにつくらせたらよいじゃないかというような議  
論をほっておきましたならば、この過大都市の混乱、あるいは国全体の混乱とい  
うものはどうして避け得られないのではなからうかと思ひます。せむこれは一つ  
の国策として何らかの形においてきめていた、たくことを希望しておるのでありま  
す。なぜこういう過大都市ができるか、自然に人間が集まって来るとは申しま  
すけれども、しかし私はやはり国に責任があると思ひるのであります。たゞえは国土  
総合開発の関係などでしきりに方々に電気ができますけれども、その地元の大き



な犠牲によつてつきました電気が、おそらくそのままほつておきましたならばさ  
らにまた東京に流れて参りまして、東京のネオンとなり、キヤバレーの灯りとな  
るというよつな傾向もなしとしないのであります。そういふように未開発の地  
域に電気を起す場合、たとえばそこへ工場でも建てました場合に、そこへは電氣  
を送る費用がかからないのでありますから時に電氣料金を守くするといふよつな  
ことがなせできないのか。交通機関の問題にしましては、たとえば東京付近など  
はりつぱな列車が走つておりますけれども、いわゆる後進地域、未開発地域に参  
りますれば、同じ料金を出しながらさかい車に束らざるを得ないといふことでは、  
後進地域に工場を持つて行つて事業を起せと言つてもほとんど不可能なのであり  
まして、これは都の將來の關係にもさういふ問題はあると思つてありますか  
国策としてつまり後進地域に人口が行くよつに、後進地域に国民が一つの魅力を  
感じてそこに移るといふよつな長持を起させることがこの際必要ではないかと思  
うのであります。



○那須部会長　ただいまの飯沼委員の御発言は、人口収容力の向題と地域的分布の向題と両方にまたがっておりますのでありますが、非常にごむつともな御意見と存じます。経済的にまたあまり発達しておられない地方に対して固なり社会なりがむしる優遇すべきところを、逆に育めておる、それが地方の産業の発達を妨げ、また人口収容力の伸びることを阻止しておる、こういう御意見でございますね。

○飯沼委員　そうです。

○笹山委員　収容力と地域的分布の両方にやはりまたがるかと思ひますが、ただいま飯沼委員のお話にありました、日本では東京等に人口が集まり過ぎる、これを何とかしなければいけないということにはまったく御同意であります。ただ今日の日本の状態では、今もお話がありましたように、ほっておけばどうしても東京に集まるといふ傾向になると思ひますが、これはあまりに政治が中央集権的になり過ぎておるのじやないかという気がするわけでありませう。たとえば経済方面から申しましても、政治の中心は東京にあつても、経済の方の大きな中心は関西にあつ



た、ところが統制経済が始まり、戦半中、戦後を通じて、どうしても東京に出て  
来ないと経済関係の仕事がでないという状態になつて、関西方面に本社のある  
たところも統々と本社を東京に移す、あるいは形式に関西に本社があつて東京は  
支社という形になつていても、實質上は本社が東京に移つておるといふ傾向が近  
年非常に著しくなつて来ておると思ひます。前は少くとも経済的には日本は東京  
と大阪と両方に中心がある一つの楕円形だといふように私は考へておりましたか  
近頃はどこまでも東京を中心としたまん丸の形がますます、強化されておるようと思  
ひますが、この矣を是正しないとなか／＼地方への経済の分散といふことを行わ  
れにくいような気がいたします。そういう意味で、政治と経済とはどうしてもしう  
のほらになりますので、政治も相当程度地方に分権する必要があるのではないか  
といふような感じがしえおるわけでありませう。私は局外者で全然その辺はわかり  
ませんが、村山委員の御意見など伺えればたいへんけっこうだと思つております。  
ただそういう場合に、これも内外漢としてはなほだ出過ぎた申分になるかと思ひ



ますか、今の日本の行政区画、府県といつたような区画はあまりにも小さ過ぎるのじゃないか、明治維新直後から今日までの地方行政区画というものは、交通通信状態から考えてもう少し広い範囲にする方が、一経済単位として成り立ちやすいのじゃないかというような感じかするのであります。この辺は私全然しろうとですからその道の方の御指導を仰ぎたいと思ひます。

それからせんたつても大部分の方から御意見のありました、いわゆる地方の強化それからそれに関連して産業のあり方も中小企業を育成する必要があるのでないかというお話については、私も日本としては中小企業をできるだけ育成強化することが必要だと思ひます。もちろん近代国家として大規模の重化学工業というものを大いに強化することも必要だと思ひますが、しかし中小企業でやゝて行ける性質のものほどできるだけ中小企業を育成して行く。もとより事業の種類によつてどうしても中小企業では成り立たない、大規模工業でなければいけない性質のものもあります。そういうものは当然大規模でやらなければいけないと思ひます



が、たとえば機械工業、特にその中の精密工業というようなものは、相当部分が中小企業でマシれるし、ことに日本の場合は家庭工業がへり込んで精密工業に専念させるという行き方が最も適しておるのじやないかと思ひます。きょういたたきました賈川さんのパンフレットにも、守玉県で時計工業を農村にやらせておる実例が載つておるようでありますが、私のある懇話な会社で、三年前から農村家庭工業と連絡して、だんだん成果を上げつつある実例を見ておりますが、スイスの時計工業のような行き方を日本としても農村問題として十分に取入れて行く必要があるのではないかというようない気がいたします。先ほどの村山委員の御提案の中にもありましたか、当面の人口収容には大工業に資金を集中することが効果的のように一応見える面ももちろんあります。村山さんの御意向はむしろその方を第一次的にするのが適當なんじやないかというように考えられておると思つてあります。そういうような大工業というものも、農村にまでしみ渡つて行く中小工業の広い視野の上に、それを基盤としてその上に立つた大工業という形で



なにと、ほんとうの強い基盤のある大工業というものは成り立ちにくいのは、なにかというふうな気がいたします。そういう意味で中小企業の育成ということは非常に重要なわけで、通産行政に当られる方々から見れば非常にやっかいな矣だと思ひますが、そのやっかいな矣を克服して行かなければいけないのじやないか、そうして大工業と中小企業とを総合的に十分結ぶつてやるということが、日本の産業をほんとうに強くするゆえんではないかというふうな気がいたします。

それから立ちましたついでに、これまた私全然しろうとであります。近耳森林の方に関係しておりますので、ちよつと申し上げてみたいと思ひます。せんだつて賀川委員からのお話があつたように、日本の国土の七割は山地でありますし、この山地の開発ということは今日の場合ゆるがせにできない問題だと思ひます。賀川委員は山地の開発によつて大いに食糧増産をしたらよいだろうという、主として食糧方面に重矣を置いての御意見を述べられておりますが、その矣もとより何ら異議のないところでありませう、同時に私は日本の森林資源の育成というこ



とに十分方を入れて行くことが必要じゃないかと思つたのです。この面は多少地味な仕事でもありますので、森林の問題はあまり中央で一般的に重兵を置かれていないようなきらいがないでもないように思ひます。日本は御承知のように風土、氣候、種々の呉で最も林業に適してゐる土地であります。ほかの地下資源と違ひまして、森林資源は成長の範圍で利用して行くのであれば、いつまでたつてもほと木は減らないわけであります。今までの粗雑な林業経営でなくて最も重兵的な力を国家が入れて行けば、日本の林業の将来はめざましいものがあると思ひます。そうして日本の森林によつて得られるものは、今まではただ燃料だとか建築資材だとか、程度に考へられておりましたが、今日は御承知のようにパルプの方面を初めとして、化学工業の一つの大きな原料として考へてしかるべきでありますし、スエーデン等の例を引きましても、單にパルプをとるといふことだけでなくて、さらにその他の化学製品を続々と木材によつて算出して居るのであります。そういうような方面に今後日本としても今日以上に産業の分野を開拓して行くこ



とかできるのじやないか。木材は石炭と同じように一つの大きな化学工業の原料だという認識のもとに森林の育成を行い、それによつて国土の荒廢を防ぐことができずし、さらに電力を増加することもできますので、国としてはこの呉に重

○那須部会長 笹山委員にお伺いいたしますが、在来日本では大きな街道は山裾の平坦

地を通つておりますが、最近九州などでは高い屋根の上を西郷道路とかいつて昔西郷隆盛が通つた道筋だというふうなことを言つておるところがありますか、そういうふうな高地にりつぽな道をつけると今まで利用できなかった森林資源が利用できるようになるというふうな話を聞くのでありますか、これについて御共鳴でございますか。

○笹山委員 そういふ呉は幾つでもあると思ひます。必ずしも非常に長い道路でなくとも、これは農林省でも年々重要視してやっておりますか、今でもまだ奥地に行くと眠つておる森林がたたくさんあります。これは結局林道が開発されれば経済的



な面からも森林資源が相当搬出されて来ると思っています。現在手をつけられておるのは経済的に便利な場所であつて、奥地の方は眠つてゐるため、ちよつとした雨でもすぐに異常な災害を起すわけでありまして、奥の方では全然眠つておる森林も相当にあるわけであります。これは單に林道というよりな地域的なものではななくて、せんだつて伺いましたような本州中部の赤石山脈の方を貫く道路というよりなのも非常にけつこうな事だと思ひます。

○那須部会長　　そういう道路をつくつて山奥の方の森林資源を利用することが合理的にさえ行われれば、洪水とかその他災害の原因にはなりませんね。そういうようなことにならないように利用できますか。

○笹山委員　　それはできると思ひます。

○村山委員　　たゞしく甲し上つて恐縮であります。今地方行政に関連した問題で笹山さんから私の名前をあげてのお話がありました。一言私の考えを申し述べさせていただきます。



政治を地方に分散すること、また府県を統合すること、いずれも趣旨は賛成なのであります。いさゝか余談になりますが、シマワフ博士が参りまして、日本の地方財政の研究をいたしますために私の方の山形県にも参りまして非常に詳細な調査を三日ほどやりました。そのときに府県統合のことについて賛向がございました。私は山形県が東京都と一緒になるというならば賛成いたしますが、一休私の県は隣りのどこの県とくつつけは財政的に楽になるのかということをお話ししたら、一つ／＼考えられて、これは困った、やはり貧乏な県はよく集まったものだといふようなことを言われて、シヤウフ博士は非常に驚きまして、その後あの人は府県統合の話をしなくなりましたのであります。実情がそういうことになつておるのであります。あまり東北の話ばかりしても恐縮であります。結局地方自治がどうして行われぬかという基本的な向題は、やはり財政力の向題であると考えられておるのでございます。前にも申しましたのでございますが、東北六県の歳入は全部で昭和二十五年に三百十一億でございます。ところがこの中で固か



らどれだけもらつておるかど申しますと二百三十一億・七四・五ノという比率であります。地方財政平衡交付金が百八億、国庫支出金が百五億、起債が十八億、こういふふうに政府に依存してあるのであります。この問題は中央地方の財政関係を改正して地方にもつと財源をやればこの問題は解決するのではないかというようによく言われておるのでございます。このことは方針として非常に望ましいし、ほくらしも努力しておりますが、しかし日本の現状はもつと極端でございまして、ただいま申した東北六県が国に対してどれだけの国費を負担しておるかということとでございますが、これは国税を出しておりますのが百五十二億、尊賣益金で国にしようけられておりますのが七十億、合計いたしましたして二百二十四億ということになるわけでございます。二百二十四億というものを国に出してあります。が、国の方から先ほど申し上げたように二百三十一億というものをもちつておりますから、七億ほどよけいらつておるのであります。従いまして地方財政の独立というので財源に国税がみな参りまして、今の各県の予算がまかなえない



これは相当多くの国庫依存の状態であります。

この問題を解決しますむう一つの前の問題といたしまして、地方においてもう少し税金を出せるようにする必要があるのでないか、つまり所得というものがもう少し地方においても上るようになければ財政力が出来ません、さように先える次第であります。現在の国民の所得をブロック別といたしまして、昭和二十五年において全国平均を一〇〇といたしますと、東北では国民一人当りの平均所得が六六であり、近畿が一七一であります。ざつと倍になつております。一、近畿と東北とを比べてまして一次産業人口と二次産業人口がどういふぐあひになつておるかを見ますと、これは二次産業の人口を一次産業の人口で割った数字であります。平均所得が一七一であります近畿におきましては九二・二になつており、平均所得の六六の東北におきましては二三・三といふことになりまして、すなわち二次が一次に対して二割しかないといふ状態であります。その結果といたしまして、これを人口収容方に関連させて考えますと、近畿地方の人口密度



が三百九十三人、東北が百三十五人というふうになつておりまして、これだけの  
ことでは結論が出て参らぬと思ひますが、しかしながら結局地方に政治の重負が  
行かない、地方自治が行われぬ、というその根本は、地方における財政負担が  
きわめて乏しいために四割五分近いものを国庫に依存しなければならぬといふ  
ことから来ておるようによ考えられますし、また結果だけを見まして、そのこと  
が産業の分布というふうなことで非常に大きな関係があるといふことは言えるの  
ではないかと考へております。従ひまして、私も畦山さんの仰せられましたよう  
に、やはり政治をもつと地方に分権して行くべきであるといふふうにも考へます  
し、また府県單位の問題等につきましても検討しなければならぬ、またさうす  
ることか望ましいとは考へますが、やはりその前提になる問題といたしまして地  
方の財政力を養う、これはまた見方によりますれば購買力、人口収容力といふこ  
とも関係して来るわけでありますか、今日まずそのことか行われて、それから  
こういふ問題が解決するのではないかと、いふような考へを持つておりますので、



しばく同じようなことを申し上げる重複をしましてことに恐縮でありますか、佐山さんの御意見もございましたので申し上げた次第であります。

○下村委員　人口問題また府県の合同その他の問題が論議されましたが、私の責任の諸矣だけを参考に申し上げておきたいと思ひます。

世界とを採しても日本のように小さな府県が地方にできおつてこれらが錯綜しておるところはない。日本の将来を解決する問題として、国土の問題とか食糧とかいろいろの問題がありますが、府県の合同ということがその中の一つの大きな問題であると思つて、これは何十年表私主張を続けておるのであります。明谷初耳の町村の数を考えたならば、初めはたしか十七万ほどあつたと思ひます。それがたんに合併されて、取今は特に非常な速度で合併されておる。一方また付近の町村を多く合せてまた市の形にならないものまでも市になるというような状態で、交通はますます発達し、あるいは経済関係においてますます総合的にますます密接になつて来ておるにもかかわらず、一体市町村だけが合同しておつてい



いのか、府県はいらないのか、このくらいこっけいな矛盾したことはないと思う。ようやく戦いが始まった東条内閣のときですか地方行政協議会というものでかきました。そして昭和二十年の鈴木内閣のときに地方総監制ができたわけです。今村山委員は財政の呉でいろく、と論じておられますが、私は総合すればまた総合したことによつて財政が在来よりもよくなる、と確信しております。

これまで各府県がみな対立してゐるために、どれだけ時なり金なり労力なりあらゆる呉において失われておるか、ということ、ほとんど数字には表わせないのです。総監制のときだと思ひますが、たとえば鳥取に火事があったときに、中国の総監部が広島にありまして、横山君がその総監部におつたのです。中国で最も小さい鳥取県の鳥取市のほとんど大部分が焼けたときに、これの回復にどれだけみな力を入れたか、ということ、このときみんな体験したのであります。それから河原田君が近畿の総監になつておつたときに、食糧問題その他琵琶湖の付近を開拓する、というような問題が出たときに、大阪にみな集まつて審議して、まあ時節板



でもあるが案外簡単に片づいた。これとは逆に、日露戦争の当時私が法規課長と  
いうのをやっておつて、また電気取締の仕事が法規課の一部にあつたときに、宇  
治川電力が計画を立てたけれども、水利の問題で滋賀県と京都府とが争つておる  
ためにどうしても解決ひでさなく、これがためにどれだけ宇治川が遅れたか、ま  
た外資は惜りたけれども仕事ができないうようなはめに陥つたのであります。  
その他九州の耳川の水力の問題、四国の吉野川、別子の方から入る水力の問題な  
どにしても、いろいろ認可を得て仕事にかかるとなると何十回とかかつております。  
これは水力電気に限らずあらゆる仕事が府県にまたかつかつておるためにどれだけ仕  
事が遅れておるか、これはほとんど想像以上でありまして、ことに交通関係の  
言つても、阪神の間で阪神国道の幅が違つるのであります。あるいは京浜国道でも  
東京と神奈川県では幅が違つておる。あるときは大郷川までの東京の方では車  
の中までタバコを吸つてもいいが、一方神奈川の方では吸つてはいけないうよう  
なことをやっておつたのであります。



私のとき、桂川の水力の問題で山梨県の都留郡から駒橋の発電所に行つて、それから東京電燈で高压線をつつほつて来るときに、上野原からわずかに電信柱何本という、駅にしても一駅くらいところが神奈川県になつておるために神奈川県の検査が済まない、そのために幾回検査が遅れたか知りません。そんなことをあつたならばほんどうに救え切れなほどあるのです。封建制度によつて譜代、外様の三百諸侯にわけられ、縦には土農工商の階級かけられた昔の日本の制度から続いて来ておる日本人の国民性には、よいところもありますが、どうも根性の小さいところがあつていけない。この府県の合同ということはただ金と如何にかいう向題じやないのです。

日本人のこの根性を直してもう少し眼光を動かしたいというのが私の論矣であります。従つて地方総監制ができるときに、閣議で戦さか着んだら元にもどるのか、という向を出したのであります。私は内務大臣ではなかつたのでいつも案外沈黙を守つて、どうしたら早く時局が解決するかということを考えて、閣議で最も言



葉數の少なかつたのが下村であつたのであります。しかしこの問題が出たときには口を出したのです。戦事が済んでもこれは強化しなければいけない、これが元の府県にもとられてはたいへんだということを主張したわけです。私は戦後戦犯容疑者になり謹慎しておつたのですが、実はマツカーサー元師に日本の地方の問題と府県の合同の問題その他ニ、三私から意見を出したのであります。これは非常に御機嫌にごわつたらしいのですが、さほどの価値があつたかどうかはわからないので、とにかくあれをあのまま置いてくれなければいけないと言つたにかかわらず、御承知の通り戦後から再び元にもどつてしまつたのであります。これがいつのときに直るのか、日本の婦人の参政権であるとか、家族制度の廃止とか、今度の戦さで敗れてから日本の得るところも少くなかつたのであります。このせつかくの好機に府県の合併ができなかつたといふことは、村山君などがもう少しそういう側で賛成してくれておつたらあるいはできておつたかもしれないといふことを考えると、非常な痛恨事であつたと私は思います。



いすれにしても私も先が短かいのだからどうでもいいのですか、もう少し日本人の気を大きくして、日本人のすべての仕事をむつと大きなスケールにしてやつてほしい。先ほど笹山さんあるいは那須部長が言われましたような道を山の不便なところにつける向題も、私そうこまかくは申しませんが、イタリアは御承知の通り観光ということを主にしておりますから、カニスからピノア方面を抜けてローマさらにナポリに向うあの沿道というものは、専ら家に聞きますとシモーテスト・ウエイを通るのではなくて、ただ経済的によいという意味でなくて、どんなところが観光的によいかという点を考えてあるという道路ができておるといふことでもあります。先ほどのお話のように彈丸道路の向題にしても、東京から赤石山脈を通り名古屋を抜けて行くというよつな時の非常な節約という意味を持つた道路も非常にけっこうでありますか、一方日本のようなところでは山の上などをドライブして風光を賞しなから、同時にそういう道ができたためにその方面の開發ができて、またパイプロダクトとして鉱山などが開発されるというよつなことも



秀えられる。私は国立公園の審議会の方に関係しておりましたか、二十数年前に初めて最初の候補地がみな出たときに、私は、たとえば十和田と田沢とは一緒にするがよい、あるいは猪苗代と日光とは合せたらよい、天草も雲仙に合せたらよい、島根の羊島を伯耆の大山に合せたらよいといふような意見を述べたのです。日本の国立公園は小さ過ぎてほとんど問題にならない。アメリカのナショナル・パークたとえばエローストン公園などに比べたらほんとうにお話にならないのです。日本では交通がますます、発達するのにいかにも現在の公園は小さいという意味でいろいろ意見を申し上げましたが、その中で富士山に箱根をつけることと大台ヶ原公園に吉野、熊野を加えて吉野、熊野公園にするといふことの二つが通過しただけで、別府を阿蘇につけることとか、その他いろいろな案が各筋から出たのですか、そういうようなものかまたこの春先から問題になつて来ると思います。やはり数を心やすくにしても数県にまたがるようにするべきそれによつて交通も発達して来るわけで、今日府県が割拠してゐるためにこれだけ交通が阻害されて



おるか知りません。新宮という熊野川のそばにある市に橋がかかったのはつい最近であります。あるいは利根川の幸手のところに橋がかからなければならなかったのに今までかからず最近やっとかかったのも、茨城県の方ではかけてほしいと言われ、千葉県の方ではかけたって割が合わないというふうなことから来ておるわけで、そういう例は至るところに幾らでもあるのです。

みな自分の県にと言う。だから阿蘇へ登って、阿蘇から九重から別府へ行く道をつくらなければいかん。前に見えているじゃないかと言つても、熊本の方では、それじゃ別府の方へ客をとられるとかいろいろなことを言つていてやらない。やつと近ごろ、熊本、阿蘇、九重、別府などをつなぐ国立公園ができた。阿蘇と霧島だつて一緒にしていいではないか。西郷さんが西南戦争に敗れて囲みを解いて城山に下る道断がある、日向と霧島の国境を越えて行くいわゆる桂葉の街道。これなんかむこういう機会にいい道をつくつたら、この方面の開發になるのではないかという意味で、当時意見を述べたのであります。過般私が国立公園の委員



としてこの方面に参つたときに、田中宮崎県知事は、今度は二十万圓を投じてあの方面に道をつくると言つていました。今佐業の方面に大きな電線開工事が始まつておりますが、私どもの友人があれを計画した当時、宮崎県方は、一体宮崎県でできた水力を福岡へとられるのは反対だといつたので、これがなかく、許さぬのみならず、友人が耳川へ視察に行くと言えは、お前命が危いぞと言われたのであります。この觀念は、どこまでも發達しておつて、私が朝日新聞にある時分に霧島へ登ろうとするに、宮崎県の連中は宮崎の方から登らすと言ひ、鹿児島の方は鹿児島から登らすと言ひ、宮崎県と鹿児島県が争つてゐるつちはまだいいが、高千穂はこつちだ、いやこつちの方だと言つて、宮崎県の中にも相争うに仕ないのであります。こういう根性がいかんと私は言ひ、だんな、在来の公園をジョイントして行くことはいいが、この狭いところへ公園ばかりつくつたつて何だと思はれる。話は飛ぶますが、芦の湖畔から箱根峠、乙女峠を抜けて、あの屋根を伝つて行く道路を、珍しくも厚生省の方から五百万圓金を出して補助してやろうと



四  
かう提案を、政府の方から出したのであります。箱根の方から行くど、左には富士の裾野からずっと靈峰が見え、右の下には芦ノ湖、仙石原がある、さらに遠く相模から伊豆の半島を見渡して行く、このくらい眺望のいい所はない。しかもホテルの設備もあれば、とにかく富士という、世界にもまれな山があるので、ここがこのドライブ・ウエイができたならば、どれだけ効果が上るかわからない。ところがこれを静岡県と神奈川県でこたく言うて、とうくつぶれてしまった。これは私どもに言わせると実にふしぎです。こういうような根性だから日本人はだめなんです。私は府県の合同ということばせざるやうにほしい。もつと大きくなれば、競争に力を費やすこともいらない。例をあげれば、藏王の石碑の話をなんかにしても言うてもいいのです。がそれはやめておきますが、至るところでもみ合っている。尾瀬沼にしても、奥日光から尾瀬の方へ抜ける車道をつくれと私どもは四十年来唱えておるけれども、それを通すと日光へ客が泊らぬと言う。そんなに泊らせたければ日光へ行く汽車をとめればみな泊る。日本人は近視眼である。真



に小さい。だから私は府景を一掃にして大きくすることによつて、有形無形にいろいろ得るところが非常に大きいのだから。そういうところからやつて行かなければいかぬと思う。これは書生論かも知れませんが、今村山さんや佐山さんから御意見をありがとうございましたので、申し上げた次第であります。

○那須部会長　大分地方行政問題が出ましたが、前田委員、石井委員、いずれもこの方面には非常に豊富な御経験をお持ちでしょうが御意見ありませんか。

○前田委員　別に特に申し上げることもございませんが、ただいま問題になっておることは非常にむずかしい問題だと思つておる。

大都市集中は憂うべき傾向であることは異議のないところで、分散が必要だといふことは目に見えておりますけれども、外国の実情はよくわかりませんが、日本のように、小さい国で、しかも資源の少ない国では、どうしても今後統制経費でやつて行かなければならぬといふことになる。それで大都市に物が集中するといふことは、防ぐことができない。何か一種の宿命的関係に日本が置かれているの



じやないかということ、非常に憂慮しております。飯沼さんのお話の通り、大都市になればなるほどいろいろな悪いことが起つて来るわけがあります。これを分散する方法はないというように、さじを投げるような感じがします。府県を合してみても、何をしてみてもだめなんで、私は地方制度調査会にも関係しておりましたので、去年の夏以来、どうしたら財源をもつと地方へわけることが出来るかということについて同僚の方と検討をしたのでありますが、結局日本では税源が非常に不均衡なので、どんなに財源をわけてみたくところで、やはり富めるものはますます富む、貧しいものはますます貧しくなる。今度、遊興飲食税を國税にして、たのやを地方へわけるといことが、業者の運動によつて成り立ちませんでした。私は非常に残念に思つて居るので、それから入場税についても、いかにわけるか、地方のものを取上げて中央へ集中する、中央集権化するといつて、観念的に社会党の方では非常に反対しておられるけれども、それはものわからないことである。つまりそういう税源は、中央のものとも地方のものとも言わずに、これはす



べて中央及び地方のオートソリテイーのものなんだ、それを皆に均等にわけられるように、お互いに共同して考えて行くのだ、こういうように頭を切りかえて、やはり最初の大藏省の案のように、一ぺん吸い上げて、そのうちの凡の半は人口に配じて地方へわけるといふことになれば、それはちやんと人口の基準によつてオートマテイカリにきまるわけであります。ただ観念的に、中央集権だ、地方分権だといふことを言わないで、みな一緒のものだと考えて、どうしたら税源を均等にわけられるかを考える、そういうことになれば、おそらく山形県はそういう吸上げ、分散によつてたぐさんの財源を得、鳥取県のごときも非常に得られることになる。富裕な府県の犠牲において貧弱県に少しでも多く行くようにできる。そういう事について少し考え方をかえて行かないと、ただ東京へ集まることを防ぐことだけを考へてもできないのではないかと思つたのです。しかしのらゆる方法は、やつてよるしいわけだ、下熱剤を飲むことも、小さい手術も、病状をよくするのに役立つことはやつてよるしいのですから、飯沼さんのおつしやつたいろいろくの



対策について、私はみな賛成でございます。たとえば衛星都市を發達させるとか、地方に工場を分散させるというふうなことに、おぼゆる手を打つべきでございませけれども、全体から言つて、これは何か宿命論的のものがあるような気がする。しかしたゞ宿命論的と言つてしまわないで、いろいろな方面から力を集めて是正して行くよりしようがないと思つて。そういうことは、共通の問題として、中央の人も地方の人と同じような頭になつて居てもらうことが必要なんです。たとえば工場の分散にしても――私、関係のある工場の話でありますか、近ごろ宮城県で大分工場誘致を一生懸命やつていらつしやるようです。東北の水電は將來は豊富になる。東京なんかで工場を持つていければ停電で工場の作業能力は制限されるけれども、東北へ行けば電力についてはほとんど心配なしにできるということをおぼえに、宮城県の方では、塩竈の軍部の持つていた土地や建物を利用して大いに誘致していらつしやるようです。私はたいへんいいことだと思つ。ところでこの宮城県知事に会つて聞いてみますと、些細なことでそれが運



はない。たとえば県の方では国有財産を県の方へ移してもらつて、長年の巨賦で工場主に与えるという考えでございますが、県の方へ国有財産を移すのに大蔵省の方ではいろいろまた規則や御都合があつて、なかなか行かない。せつかくの長い向の御計画ですけれどもそれでつかえておつて、私の間接に關係してゐる工場なんかむしろ弱つておるのであります。そういうようなことを集めて人口問題調査会などでなつとお取上げくださつて、中央官庁は、地方を開發することに人口の分散等については特別な配慮をしなければならぬというふうなことを御決議くださる必要があるのでないかということを感じておる次第でございます。

○石井本員 地方制度の問題というわけではございませぬか、貫川さんの印刷物をここで拝見して、私もとして非常に同感してゐる處が多いので、それに關連して少し申しあげたいと思つてあります。

人口の都市への集中の傾向を防止するといふか、適当に調整するといふことは、



結局地方の農村なり山村における就業の機会をできるだけ多くするということ以外にはこれを押える方法はないことは申すまでもないわけであります。その地方における就労、就業の機会を多くするために地方へ工業を興すということも、できれば非常にけっこうでありますけれども、工業の立地関係については一定の制約がございますから、工業を地方に分散するといつてもおのずから多くの制約を受けざるを得ないのじやないかと思ひます。コストが安く、優良なものかできるような条件——原料の輸送の関係とか、動力の関係で、制約があるから、就業の機会となり得るような大きな工業が地方に分散されるということは、現在の組織においては多きを望むことはできないのではないかと思ひます。結局、農村や山村においては、国土の利用という本来の立場において、できる限り就業の機会を多くするというほかはないと思ひます。その意味において質川さんのお書きになつたものにまったく御同意を申し上げる呉がたくさんあるのでございませう。

御承知のように、日本の耕地面積は国土の一五%足らずであつて、各国と比較



しても非常に割合が少い。国土の大部分は、従来の農業のやりかたでは耕地になり得ない傾斜地ないし森林であります。そうして耕地になつてゐる部分は非常に果敢的な利用をして、小さい面積で多くの人口を収容してゐることは、世界的にもその比を見ないのであります。この耕地が年々壊廢して行くということは、日本の食糧問題から見ても、人口問題から見ても、非常に大きな問題であらうと思つのであります。耕地のつぶれ、または廃止されることと、人口の増大のため、日本の食糧の輸入量は、このままに推移するならば、年々増加するわけであります。日本にとつては現在ある耕地は非常に貴重な財産であつて、これを一パン壊廢されればもう回復する余地はないと言つていいくらいでありますから、耕地の壊廢を防止することは大きな問題であらうと思つております。最近東京その他の大都市の近郊では、長い間りっぱな耕地になつていたところをつぶしてどんどん住宅かできてゐる。そして人口がどんどん都市へ集中して来る。この問題を考えなければならぬ。



それには、賀川さんのこれにもありますが、やはり便利なところに高層建築を建て、設備のいいアパートをつくるということが一つの有効な方法じやないか、これについて研究をして行くことが必要じやないかと思ひます。

私は最近イタリアへ参りましたが、ローマにおけるアパート建築の発達是非常に顕着なものであるそうでありまして、私どもちよつと見ただけでも実に設備の整つたものかどしどしできておる。しかも建築家に聞いてみるとそれほど高価なものではないようであつて、この点については日本ではまだ、非常に研究を要することがあると思ひます。

これに関連して、單に耕地の問題だけでなく、膨大な都市ができることによつて、交通量がふえる。交通機関のために投資される額が多く、しかもなおラッシュ、アワの混雑を防ぐことができない、そのための勤め人の能率が非常に落ちる、また燃料の消費量も国全体としてはなかく、大きな問題があるのじやないかと思ひます。日本では家庭の燃料の半分は薪炭によつてゐる。この薪炭の消費料は実に



莫大なものである。そしてその使い方はまことに粗放なやり方を、長年の慣習でやっておる。これがアパートになつて、セントラル、ハイツのようにしますと、都市における薪炭類の消費料は相當に節減できるのじやないかと思ひます。これは森林資源の維持、育成の上にも、やはり大きな効果があるのじやないか。これは、笹山さんからも話のあつた林地の育成の問題と関連して、相當考究すべき問題だと私は思ひます。

それらの傾斜地と林地の現在以上に能率的な使い方はないかという問題であります。これは食糧問題とも関連をして、日本としてどうしても解決しなければならぬ段階に現在来ておると思つてあります。これがまた人口問題と非常に関係がある。傾斜地は、従来日本の農業のやり方では農地として利用することはできませんけれども、あそこを牧草地として利用をして、畜産をやることになれば、また、利用の価値がある。それには草の利用ということを考えて行く段階に来ておると思ひます。御承知のように日本の農業は大体水田を中心にして発達



をして来ておつて、畑作の農業は非常に遅れてゐる。ところがヨーロッパの農業は畑作農業であります。要するに草の農業として発達して来ておるので、草の利用、草の研究というものは非常に遅んでゐるわけであり、日本は逆であつて、草の利用といふものは、農業的見地からは從來やられておらない。むしろどうして雑草をふやさないようにして作物を育てるかといふくらいであつて、草を利用するといふ考え方は、在来の日本の農業においては非常に稀薄である。従つて草の研究ができておらない。これを云つてこれからやらなければいかぬ。国土の人口収容力を多くするために傾斜地、山地における就業の機会を多くするために、草の研究をしなければならぬといふことは、はっきり打出していただくことが、私には必要じゃないかと思ふ。畜産をやるといつても、安草ができて初めて畜産が成り立つので、今のようなやり方ではどうしても濠州その他の畜産物に太刀打はできないわけであり、ます草の研究をやらなければならぬ。

そして、林地と牧畜を結び合わせる方法を考える必要があるのではないかと思ふ。



現在國連の下A.においてはフォレスト、エリアの畜産のやり方について時に委員会を設けて研究をしておりますが、これは日本にとって非常に大きな課題であると考え、林地として利用しながらその下草を利用するにはどういふふうにやればいいのかという問題、これをこの際力強くやることに必要であると思ひます。

日本人は、南方の作物である稲を北の方まで持つて行くだけの農業上の技術を持つてゐる。それからサツマイモは、カライモと言つたのを鹿児島で栽培してサツマイモになつたが、たんに、北へ来て、戦時中に非常な努力によつて、従来イモがつくられなかつた東北の宮城県の近くまでつくれるように、品種の改良が進んでゐる。やかつて北の方でも十分つくれるようにすることができ、るのでないか。これだけの能力を持つ日本人が、稲の改良やイモの改良に注いだと同じ努力をもつて、草の研究、林地の研究をやつたならば、必ずできるのじやないかと私は思つております。これが日本として残された領域であつて、それを何とか考えることが、やかつては地方における人口の収容力を増大する道ではない



かと思つたのです。工業の地方分散といふことにそう大きな期待をかけることはむづかしいのぢやないかと考えるわけです。賀川さんのお書きのものに盡きておるわけでありますけれども、気づきましたことを申し上げた次第であります。

○林委員　この回の会合のときも、いろいろな点において考えさせられたのであります。すが、さつきからのお話も、人口収容力増大につき大要参考になることで、感謝して聞かしたのであります。

ところで日本の漁業の問題、時に沿海漁業の問題であります。今日漁村は非常に窮乏しております。この問題を相当考へて行かなければならぬ。遠洋漁業についてもいろいろ問題がありますが、現在實際困つておるのは近海漁業に従事しておる沿海の漁村であります。私、漁村の方を少し研究しておりますが、漁村も相当人口過剰であります。従来から、漁村では収容し切れない人々が多数、他へ出て行つております。悲観すべき実情であるように思ひます。この魚の豊饒な、そしてそれが食糧自給上大きな役割を果している日本において、何とか水産工業



を漁村に興して水産物を加工・利用し、そこに漁村の人口を吸収するということ  
は、今考えなければならぬ重要なことだと思います。漁業の問題はこの委員会  
はあまり出ておりませんので、気がついたことを申し上げたのでございます。

それから一億人口という問題、十数年後には一億人口になる、またそれが国と  
して必要であろうということは、私は当然なことであらうと思う。現在、生活が  
できないからというので減らすとか減らさぬという問題が起つて来ているのであ  
ります。一億人口を持つということは、繁栄せんとする国においては当然なこ  
とである。そこでこの人口を維持し、收容して行くためにどうすればよいかとい  
うのが、この間の説明の要旨でございました。

ところでわが国の最近の国際収支のバランスを考えてみますと、非常に苦しい  
立場に置かれておる。これは当然五年、六年続く。わが国の生産物が海外に出る  
のは少くて、輸入の方はどんくしなければならぬ。これはわが国の自立経営の  
立場からいって大きな問題である。これは結局わが国の産業がある意味において



非常に低いということである。私どもの同僚の自然科学をやっている人の意見では、日本の産業は三十年遅れておるといふ。この言葉がいゝか悪いかは別として、バタヤ産業という言葉を耳にする。これは結局わが国の科学技術が遅れているといふことでもあります。そういうような産業の程度が非常に低い。これを高度産業にすることによつて、将来未だるべき一億人口を収容することができ、少くともこの線に沿つて考えて行かなければならぬだろうと私は考えております。この審議会においてこれを解決するといふのではなくて、わが国が高度の自立産業を持つていふことによつて、来るべき一億の人口を収容する、こういう前提のもとにおいて、私はこの審議会の一員として御関係申し上げたいという考えを持つております。そういうふうに考えると、どうしても高度の産業といふことになりませんが、重工業もやり、また特にわが国における人口収容力の重典であるところの中小工業といふものを高度化しなければならぬといふことになる。高度な精密な工業、しかもその生産物は国内向きとしていゝものをつくるのみならず、海



外へ出してりつぱに競争に勝つようなものをつくらなければならぬ。

それにはやはり科学技術が根底であると思ひます。たとえば山地において、造林や、樹木の利用や、いろいろのことを考へて行く場合においても、結局科学技術の向題に歸する。ところが日本の科学技術といふものは、いかにせん、三十年程れておる。この貧弱な科学技術をもつて、一億の人口を育成する高度の産業を興そうといふのですから、たいへん困難な氣持がするのであります。どうしてむこは十年、二十年後には技術も優秀にするようにして行く、これは基礎的な向題であるように私は考へる。

その具体的な例でござりますが、現在あるものを相当強化しなければならぬ、あるいは大きな研究所を持たなければならぬといふことになる。地方の中小都市がだんく、貧弱化して行くのは、結局においてその地方の特殊な産業といふものが発達しないからでもある。それを発達させるために、現在ある研究所、水産研究所とか、林業、農業の研究所をもつと拡大強化して行く。山形県なら山形県にお



ける特殊な産業を発達させるための、いろいろな試験所を強化して行くことか必要だと思います。今のままではあまり期待できないのでないか。農林試験所あたり  
の経費を見ましても、国家はよほど多くの経費をかけて、そして人材をあそこに  
送り込み、研究の成果を上げて行く、そして同時にその成果が国内の多くのとこ  
ろに広く浸透して行くようにしなければならぬというように考えるのであります。  
これは今年や来年に目に見える効果はないかもしれませんが、しかしながら基礎  
的な向題として考えなければならぬと思います。十数年後に一億の人口を収容す  
る場合において、今のようなバタヤ産業のようなことではいかぬだろう、最低に  
いるものは外国から輸入しても、それ以上のものを国外へ出して行く。そのため  
の高度の技術を考えて行かなければならぬと思います。

あまり時間をとつてはなんでありますから、これで終ります。

○那須部長 大分時間をとりましたが、長村さん、何か御意見がございましたら……。

○長村委員代理 代理で参っておりますからいふれませ……。



○村瀬委員 私は、この前本多さんからお話しになつた御意見は非常にけっこうな御意見だと存じております。従つてあの案について実行方法をできるだけ早く宣明されることが必要であると存じます。

なおそれに加えて、移民の問題について十分な御検討を願いたいと存するものでございます。

それから先ほどから意見が出でいた過大都市の問題でございますが、これについては、何ゆえに過大都市ができるか、どうしたら過大都市を防止することができるかといふことについて、十分御研究を願いたいと存じます。国が一つの方針を宣明することも必要であると存じます。ただ單に方針を宣明するといふだけでなしに、何ゆえに過大都市ができるか、どうしたらそれを防止することができるか、その具体的な方法について検討する必要があるのではないかと存じます。それについて工場の分散といふ問題についてさらに十分研究をするとか、草の研究を進めるとか、いふことは、非常にけっこうなことであると存じます。



それから府県の併合、広地域の向題についてお話がございましたが、私もかつて  
それについていろいろの本を讀んでみたことがございます。財源の向題を別に  
たしまして、やはり府県あるいはこれに準ずるような自治団体が大きくなること  
は、時代の趨勢に応じて必要であるのではなからうかと考えておる一人でございます  
ます。この点について下村さんからいろいろお話がございましたが、私はその御  
意見に対して非常に共鳴をいたしております。

それから中小工業の向題につきまして、私ども日本においては大工業  
よりもむしろ中小工業の方が適當であるという部門がいろいろあると存じており  
ます。これと地方の農村とを十分に結合させて、人口の収容について考えるとい  
うことは、非常に必要であるのではないかと存じております。

この前、濱川さんから、バイオケミストリーの向題が出ました。それも非常に  
おもしろい向題だと存じております。徳川作物研究所などで長い研究をいたして  
おりますが、また研究の過程にあつて、今後十分に研究する必要がある向題であ



ると存じます。

その将来における成果というものは、非常に期待すべきものがあるように存じますので、廣川さんのお話に従つて、この面については従来以上に研究を進め、その結果を利用するように努力することが必要ではないかと存じますのであります。

何と申しましても日本は科学技術の研究の増進ということが最も必要であることは、先ほどからお話があつた通りでありまして、私はこの呉について行政審議会等においても主張したのであります。日本がさらに高度の科学技術の促進をして、将来人口の吸収に資するように努めることが必要である。これは基本的な方法として、本多さんのお話の中に十分に盛られておるのであります。これの実行方法についてさらに力強く宣明せられることを希望いたします。○山際委員代理 本日山際はやむを得ない用事がありました。伺えませんでした。私が代理に出ました。いろいろ勉強させていたいただきました。お礼を申し上げたいと思ひます。



○那須部長 御出席の委員各位からは一応お話を伺ったわけですが、さらに専門委員の皆さんに何か御意見がございましたらお述べをいただきたく存じます。

○館専門委員 時に美濃口さんから、何か御意見がございましたら……。

○美濃口専門委員 日本の経済は、国際経済の中に広く織込まれており、それによつて非常に大きく左右されておる。それで、経済外交という問題がないと解決しないという事を申し上げたいのです。たとえば東洋の市場の問題、賠償をどうしたらいいかという問題が、われわれの人口問題に直結つながつているのであります。この向オーストラリアの大使館から私呼ばれて、日本はどうしてやって行かかという事を心配された。またもう一マシ日本は戦争を始めるのではないかと非常に大きな不安を持っておる。つまり日本の国内だけではやって行けないという事を日本人以上に外国人はよく知つてゐる。ですからそういうことをお考え願わなければならぬと思ひます。

それから中小工業の問題ですが、私は中小工業の問題は人口問題と同じように



二十何年間勉強いたしました。今までの古い学説によりますと、中小工業というのはつぶれてしまう。保護するべきものだ、という議論があります。

アメリカなんかでも中小工業はなくなつてしまふ、という議論はありましたが、戦争後にアメリカの方から伺つたが、アメリカはたゞのことは中小工業たそうです。そして、会計の指導、技術の指導とか、そういう指導書をたくさんつくつておやりになつておる。日本でもおやりなさい、ということをおつた。大工業だけがいゝのではない。機械工業は中小工業をいゝ。リミット・システムで、單位々々で完全にできる。自動車、自転車なんかもそういうようにできる。東京の自転車産業は一貫産業で大きな工場をつくつておりますか。これは遅れた形態であります。これはリムならリム、だけを分業で小さな工場で作る。徹底した分業が行われている。つまり大きな経営の利益よりも、社会的に分業した方がはるかに大きい。アメリカの機械工業はそれをやっておる。むしろ中小工業を育成して行くことが必要である。市場が非常に大きいと大量生産が有利ですが、市場が小さい場



合には大量生産は不利であります。そういう場合には中小工業というものがどうしてもなけねばならぬ。よく中小工業はつぶれる／＼と言いますけれども、十九世紀の蒸気力の時代、マルクスの時代にはそうであつたけれども、二十世紀になりますと電力が発達しましたから、どんな田舎へ行つてもできる。農村工業もど／＼機械化できる。そういう点で、私は中小工業はつぶれてしまふ、保護しなければならぬ、というものではないと思つております。今向題になつておりますのは、今まで中小工業製品が海外へ多く出ておりました。しかし中共なんかの市場が今はなくなり、中小工業者は困つてゐることは事実です。この市場の回復はおそらくむずかしいと思つてゐる。今まで中小工業でつくつたものは海外へ向けていたが、これからはむしろ国内向けに発達させるという考え方が必要だと思つてゐます。そういう点で、中小工業は確かに質的な面が遅れてゐる。技術の指導、会計の指導というものが非常に必要です。そして生産を標準化して行くといふこと。それから下請工業がたくさんある。これが大工業の威圧によつていじめられてゐる。しかし、



下請の協同組合をつくつて大きい会社と団体交渉的にやらせたら、そういう不利益な面がなくなると思う。技術的に立つて行けるものが資金的に押えられるという兵を克服すれば、中小工業というものはつぶれないで長くやつて行ける。心配はないと私は考えております。

それからもう一つ、工業の分散の問題でございました。工業を地方に誘致するというところでございます。私は、工業は非常に地方分散的な性質を持つていると思います。一つは賃金の安いところを求めて行く。農村にまで入り込んでいる。綿工業を調べました。山の奥まで入つています。それからもう一つは立地的に電力の安いところへ行く。富山県なんかおいぶん大工業が集まつておる。私は工業が分散する傾向はすいぶん強いと思う。これは輸送力にも関係があります。石炭の重量のあるものをたくさん使う工業は、石炭の産地の方へ移る。電力をたくさん使うものはその豊富どころへ集まるというように、原料その他に左右されます。原料などに制約のないものは消費地の近くに来るといふ傾向を持っています。



る。かなり分散的ではないかと思ひます。もつとも東北方面にあまりないのは、  
雪害の向題、交通の向題があるので、なかなかむずかしいと思ひます。とにかく、  
工業の分散ということは、いろいろの条件さえそろえはできるよつに思つのであ  
ります。今の状態でもかなり分散は可能だと思ひます。

それだけあります。

○那須部会長 美濃口さんのたゞいまの経済外交のお話。これは今までここで出な  
つたポイントで、非常に大事な向題だと思ひます。ありがとうございました。

○賀川委員 たゞいまの経済外交につきましては、一昨年世界連邦アジア会議で決議  
しておりました。今度五月二日からは、国連加入国の向題もそれに  
かかつてありますし、第二次アジア会議でもペイメント、アライアンスで貿易障  
戻の向題を取上げるのであります。そしてできるだけ早く三角あるいは四角でも  
いふから、貿易のスムーズな発展をしなければ、實際経済外交はできません。実  
は四年前に、アメリカから石油を協同組合に売つてやろうといつたので、私はすぐ







邦でやっております。實際のことについて、ちよつと申しました。

六八

○永井委員 実は先日本多専門委員から御陳述になりましたことは、主として国内関係であります。国際関係の方面は美濃口さんが今担任して策をつくられておる。相まつて人口対策委員会の成果か、おそろく一箇月後にはまとまるかと思つて、これをまとめましたら、またお知らせいたしますから、あらためて御審議いたしたいと思います。

○那須部会長 そのときまた美濃口さんからもう少し詳しいお話を伺う機会が与えられたらしめわせに存じます。

○賀川委員 この向も申し上げました通り、インドネシアの方から使いか来て、私は改進黨の顧問をしておる苜米地さんに頼んだのですが、向うの方はしきりに日本の貿易を聞いてほしいと言つて、いろいろたのめがあるのですが、もう少し協同貿易を盛んにしてほしいのです。私は農協に申し込んだけれども一つにならない。一つにすれば、石油などでも実費で来るのです。何ももうける必要がないのです。



そのようにして、経済外交においても、もうける、しうけない、ということを考えないで、協同組合貿易の方に進展すれば、非常にスムーズに進むのじやないかと思ふ。食糧問題はことにどうです。

○那須部長 本日は、御列席の皆様から、人口の収容力及び地域的分布の問題にも若干触れまして、非常に意味の深い、示唆に富んだお話がたくさん出たのであります。いずれこれは速記録として近くお手もとにおまわしできるようになると思ひます。これらのお話し、だんく、と回を重ねて参りますと、人口の収容力をいかにひやすかということについての実際の政策について、ある見通しが得られるのではないか。その際にさらに検討すべき事柄は、先刻お話し上げました人口対策委員会の方にお願ひするなり、あるいはまたこの会でも専門委員の皆様にお願ひいただくなり、いたして参りたいと思ふのであります。

本日は大体この程度で打切っておきたいと思ひます。次会については、また事務局において御都合あるようで、ただいま委員各位の御都合を伺つて日をき



めるといふところまで進んでおりませんので、いすれ文書をもつて御都合をお尋  
ねすることにしたと存じます。では、お忙しいところ、ありがとうござい  
ました。

午後四時十五分散会